

# つれづれ 彩時記



辻浩和

歴史学の進展は、教科書で習った知識を次々に塗り替えていく。例えば中世の武士と貴族は対立する存在ではなく、むしろ共通面が多いという理解が現在の通説である。また最近では、兼好法師が「吉田兼好」というのは吉田氏による捏造だったと判明し、話題になった。

教科書に載るような事柄ではないにせよ、研究者は皆、これまでとは違う新しい解釈を打ち出そうとしている。その材料となる史料の発見は、どんなに小さなものであってもやはりうれしい。今回は、最近気が付いた小さな発見について書きたい。

「徒然草」に、説教師になろうとした男の話がある。男は法会に行く時のために、まず乗馬を習った。施主との宴会のため、次に早歌を習った。二つを学んでいくうちに年を取り、説教を習う時間が無くなってしまった。道草ばかりの筆者には身につまされる話であるが、ここでは宴全表として早歌が登場すること注目したい。

早歌とは、鎌倉・室町時代に流行した長編歌謡である。例え

## 早歌史料の発見

ば、「酒」という曲では「酒に明徳の誉あり。しかも百葉の名を献す。万年を延るもてあそび。みな情を催す嫁たり」といった調子の歌詞が、延々43句も続く。漢籍や和歌の素養がないとなかなか難しいが、長文を大勢で斉唱すると一体感が生まれるので、宴会で好まれた。

早歌は鎌倉の武士社会で作られ出された武士の芸能とされる。鎌倉では1270年代から歌われ始め、1290年ごろから盛んに歌詞集が編纂された。一方で早歌に関心を抱く貴族や僧もいた。1319年には京都・大原の寺院に早歌の本が伝わっており、1322年には貴族が早歌を歌っている。「徒然草」は1330年代の完成とされるので、このころまでに鎌倉から京都の上流階層に早歌が伝わり、広まっていたのだらう。だからこそ、説教師をめざす男は早歌が必要と考えたのだ。

以上はこれまでも知られていたことだが、最近、春日若宮関係の史料を眺めていて、早歌に関する記事に気付いた。その史料では、1307年に「女目クラ（盲人女性）」5、6人が春日若宮で早歌を歌ったとある。当時、盲人女性たちは寺社の門前で歌や語り物を披露して施しを受けたので、この時

## 3行に見える たくましい姿

も人の集まる神社で歌おうとしたのであろう。その2カ月後には、境内では大声で早歌を歌ってはいけないという命令が出されている。社司・氏人、神人などの春日若宮関係者や、興福寺僧の中に、そうした行為を行う者が多かつたらしい。前回、これらの人々が神社に白拍子女を呼んで宴会をし、処罰された事例を紹介したが、彼らは宴会で早歌を合唱し、親交を深めていたようだ。これらの記事は、先ほど見た京都の事例よりも10年以上早い時期に、奈良で、しかも、庶民層の人々が早歌を楽しんでたことを示している。早歌という芸能は、これまで考えられていたよりも、ずっと広い裾野を持っていたのかも知れない。

もう一つ興味深いのは、盲人らが早歌を歌ったことだ。この時代、盲人の多くは施しにすがって生きるしかないのが実情だった。より多くの施しを得るために芸能を披露した人々も多い。盲人女性の歌謡も、そうした切実な理由を持っていたと考えられる。だからこそ彼女たちは、奈良ではやり始めた最新の芸能をいち早く取り入れ、人気を得ようとしたのではないか。たつた3行の記事だが、名もない盲人女性たちの、中世社会を生き抜くたくましさをつかうことが出来る。

（川村学園女子大学准教授）  
◇月1回掲載します。

2018年8月23日（木）付 朝日新聞 大阪版 夕刊 掲載

承諾番号 18-4043

朝日新聞社に無断で転載することを禁じます